

英語習熟度別に見る英語学習の実態と英語に対する意識の違い ～これからの英語の学習と指導への示唆～

東京外国語大学専任講師
工藤 洋路

「第1回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」において、中学2年生の英語学習の実態やそれに対する意識が明らかになったが、その結果の中では、小学校での英語活動の経験など全体的な傾向がみとれるものもあれば、学校外での学習時間など生徒個人によってバラつきが見られるものもある。そこで、これらの実態の背景をより詳細に探るために、英語習熟度別に「生徒調査」の結果について分析を行った。

1 概要

「生徒調査」では、中学生の英語学習の実態と英語や外国に対する意識が明らかになったが、さらに詳しくその背景をとらえるために、調査対象校の一部の学校に対して英語習熟度を測定するテストを実施した。本稿では、英語習熟度別に、「生徒調査」の回答結果を分析し、習熟度の違いによって、英語学習の実態や英語に対する意識がどのように異なるのかを調査した。

1) 分析対象

本稿の調査の分析対象は、「生徒調査」（2009年1月～2月実施）の調査対象校のうち、地域別に、「大都市」「中都市」「郡部」から1校

ずつ選定した3校の中学2年生211名である。対象校の詳細は表5-1のとおりである。

2) 英語習熟度測定テスト

英語習熟度を測定するためのテストとして、GTEC for STUDENTS(以下、GTEC)のCoreタイプを各校の対象生徒に2009年1月～2月に実施した。この試験では、リーディング、リスニング、ライティングの3技能について、習熟度を示すスコアが示され、これらの総合スコアにより英語習熟度を測定することができる。リーディングは「語い語法問題」、「情報検索・概要把握問題」、「要点理解問題」、そしてリスニングは「イラスト説明問題」、「会話応答問題」、「課題解決問題」、「要点理解問題」からそれぞれ成り立っている。また、ライティ

表5-1 本調査の対象校と人数

学校	地域	人数
A校	大都市	60 (男子25、女子35)
B校	中都市	60 (男子26、女子34)
C校	郡部	91 (男子40、女子51)

ングでは、自由記述式の「意見展開問題」が出題され、意見、理由、語い、文法、構成・展開の5観点から評価される。各技能の上限スコアは、リーディングとリスニングが170、そしてライティングが100であり、総合的には440が上限となる。テスト時間は70分である。

テスト結果の概要は表5-2のとおりである。

3) 英語習熟度カテゴリー

英語習熟度別に「生徒調査」における各項目の回答傾向を分析するために、GTECのスコア結果を、表5-3のとおり、4つのカテゴリーに分類した。まず、GTECが示すスコア範囲として、「中学教育で育成するゾーン」の249以下と、「高校教育で育成するゾーン」の250以上に分類した。「高校教育で育成するゾーン」では、GTECが示す能力指標として、300～379は「ネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル」、380～439は「英語圏へのホームステイや海外旅行に行き、英語体験を楽しめる英語力」と詳細

な分類がある。しかし、本調査でそれぞれに該当する生徒は25名と11名と少数だったため、この両範囲（300～439）を合わせて最上位の習熟度レベル「4」（36名）とした。そして、「中学教育で育成するゾーン」を超えてはいるが、「ネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル」に達していない生徒を習熟度レベル「3」（47名）とした。「中学教育で育成するゾーン」には、本調査では128名の生徒が該当するが、任意のレベル分けとして、189以下をレベル「1」（53名）、190以上をレベル「2」（75名）と設定した。この190というスコアは、特に理論的根拠とはならないが、本調査における最上位者が該当する「英語圏へのホームステイや海外旅行に行き、英語体験を楽しめる英語力」に到達するために必要な最低のスコア380のちょうど半分となる。

学校別の英語習熟度別の人数は表5-4のとおりである。

また、技能別に習熟度を分類するために、GTECが提供する「技能別スコアと習熟度ガイドライン」に従い、各技能の得点を分類し

表5-2 GTEC for STUDENTS平均スコアと標準偏差

学校	トータル		リーディング		リスニング		ライティング	
	平均スコア	標準偏差	平均スコア	標準偏差	平均スコア	標準偏差	平均スコア	標準偏差
A校	287.1	75.5	90.6	36.4	110.9	29.8	85.7	18.6
B校	222.4	46.2	64.3	19.7	88.8	19.3	69.4	20.9
C校	214.2	61.7	60.9	26.6	87.6	22.2	65.7	26.8
3校平均	237.3	69.6	70.3	30.9	94.5	25.9	72.4	24.5

表5-3 GTEC for STUDENTSのスコアに基づく英語習熟度カテゴリー

スコア	育成ゾーン	スコア範囲	能力記述	習熟度レベル	人数
～249	中学教育	0～189	(※で示す英語力に必要なスコア380の半分未満)	1	53
		190～249	(※で示す英語力に必要なスコア380の半分以上)	2	75
250～	高校教育	250～299	—	3	47
		300～379	ネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル	4	36
		380～439	(※) 英語圏へのホームステイや海外旅行に行き、英語体験を楽しめる英語力		
		440～	—	—	—

表5-4 英語習熟度別とライティング習熟度別の人数

(人)

学校	英語習熟度				ライティング習熟度			
	1	2	3	4	1	2	3	4
A校	6	13	15	26	2	19	15	24
B校	13	28	17	2	7	34	12	7
C校	34	34	15	8	17	45	23	6
3校合計	53	75	47	36	26	98	50	37

表5-5 英語習熟度レベルとライティング習熟度のクロス

(人)

		ライティング習熟度				計
		1	2	3	4	
英語 習熟度	1	23	28	2	0	53
	2	3	48	20	4	75
	3	0	14	19	14	47
	4	0	8	9	19	36
計		26	98	50	37	211

たところ、ライティングの得点は複数の習熟度に分散している(表5-4参照)が、リーディングとリスニングについては、ともに196名もの生徒がレベル「1」に分類されたため(図表省略)、本調査では、ライティングのみを技能別の分析の対象とした。

なお、表5-2と表5-4のとおり、学校間でGTECの結果に基づく習熟度に差が見られるが、学校間の分析は、指導目標や指導方法そして地域状況など学内外のさまざまな要素が関わるため、ここでは行わない。本稿ではこれら3校の調査対象の生徒を一括して習熟度別に分類し、分析を行った。

次の表5-5は、英語習熟度レベルとライティング習熟度のクロス集計表である。たとえば、英語習熟度レベルが「2」の生徒については、ライティング習熟度は「1」から「4」まで存在し、また、ライティング習熟度が「2」や「3」の生徒については、英語習熟度レベルが「1」から「4」まで存在する。ここではライティングの習熟度のみ示しているが、ある特定の技能が得意だったり、あるいは苦手だったりする生徒が存在することがわかる。従って、特に、本稿の最後に示す「6) 英語学習のつまずき」に関しては、英語習熟度とライティング習熟度の2つの観点から検証することとする。

2 習熟度別分析

ここでは、表5-3で示した習熟度別に、「生徒調査」の結果を検証することによって、習熟度ごとに特徴的に見られる英語学習の傾向やそれに対する意識について明らかにする。

1) 英語の得意・苦手の基準について

「生徒調査」において英語が得意・苦手について回答を得たが、この結果を英語習熟度と照らし合わせたものが表5-6である。習熟度が上がるにつれて、英語が得意であると自己評価する生徒が増えている傾向が見られる。ただし、各習熟度レベルにおいては、得意・不得意について、3段階ないし4段階の回答の幅が見られることから、英語を得意あるいは不得意と感じるその基準は、GTECで測定できるような英語力全般の習熟度だけではないことが考えられる。おそらくは、自分が英語が得意かどうかを、学校の定期試験のテスト結果や学期ごとの成績評価を参考にして判断しているものと思われる。つまり、学校の成績で評価される「学習したことの達成度」が、「英語全般の習熟度」よりも、中学生にとっては強い判断基準であると考えられる。学校の成績のような達成度評価になじめずに、動機づけが下がっている生徒には、

表5-6 英語の得意・苦手

(人)

英語習熟度	とても苦手	やや苦手	やや得意	得意	未回答
1	35	14	3	1	0
2	31	26	18	0	0
3	5	15	26	0	1
4	1	2	24	9	0

表5-7 小学校での英語活動と学校外での英語学習の経験

(%)

英語習熟度	小学校での英語活動の経験	小学校での英語活動の頻度が月2～3回以上	学校外での英語学習の経験
1	90.6	16.7	30.2
2	98.7	29.7	32.0
3	95.7	37.8	44.7
4	100.0	50.0	63.9

注1)「小学校での英語活動の経験」は、「小学生の時、学校で英語の授業や活動はありましたか」という質問に「あった」と回答した%。サンプル数は211名。

注2)「小学校での英語活動の頻度が月2～3回以上」は、小学校英語の経験の有無について「あった」と回答した人に対して、「小学校での英語の授業や活動はどれくらいありましたか」という質問に、「月に2～3回くらい」「週に1回くらい」と回答した人の%。サンプル数は203名。

注3)「学校外での英語学習の経験」は、「中学校に入学する前(小学生の時やそれ以前)に、学校の授業以外で英語や英会話の勉強をしていましたか」という質問に「していた」と回答した人の%。サンプル数は211名。

GTECのような英語の全体的な習熟度を測るテストの結果から、動機づけを高めるような指導も考えることができるであろう。学習意欲を高めるために、評価に多様性を持たせることが重要だと考えられる。

2) 小学校での英語活動と学校外での英語学習

小学校段階での英語活動や英語学習が、中学2年生段階での英語の習熟度にどのような影響があるのか、「小学校での英語活動の頻度」「学校外での英語学習の経験」「英語学習」の内容について詳しくみてみる。

小学校での英語活動はほとんどの生徒が経験しており、その開始時期については、英語習熟度による違いは見られないが、表5-7が示すとおり、習熟度が高い生徒は、そうでない生徒に比べて、小学校での英語活動の頻度が高い。

加えて、習熟度の高い生徒は、学校外での英語学習の経験率も高い。学校外で英語が学習できる環境が整っている地域とそうでない地域が存在すると思われるが、いずれにせよ、学校外でも英語の学習を行う経験を持つこと

ができれば、中学校における英語学習にプラスの効果을及ぼすだろう。

さらに、中学入学以前の英語学習の内容について習熟度別にみると、表5-8が示すように、「英語を聞くことや話すこと」と「発音の練習」の経験が、中学校での英語習熟度に影響を及ぼしている可能性があるとして推測できる。英語の習熟度が高くなるレベル「4」である生徒の9割以上が、中学入学以前の学習で、英語を聞いたり話したりしていることから、小学校段階では、音声を重視した練習が将来的に効果的だとわかる。

3) 中学校の授業以外の英語の勉強

表5-9の示すとおり、習熟度が高くなるにつれて、中学校の授業以外での勉強時間が増えていくことがわかる。しかしながら、習熟度が高くなるレベル「4」について細かく見ると、必ずしも全員の勉強時間が長いとはいえない。このことは、習熟度レベル「4」(「ネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル」)に到達するまでは、一定量の学習時間が必要だが、そのレベルに達し

表5-8 中学入学以前の英語学習の内容（英語習熟度別） (％)

英語習熟度	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
英語を聞くことや話すこと	50.9	73.3	68.1	91.7
アルファベットの読み書き	66.0	74.7	59.6	69.4
発音の練習	52.8	61.3	51.1	72.2
歌やダンス	56.6	58.7	61.7	77.8
英単語の読み書き	39.6	57.3	51.1	58.3
英語の文を読んだり書いたりする活動	37.7	38.7	31.9	41.7
文法の学習	11.3	9.3	10.6	27.8

注) 「中学校に入学する前に、小学校や習い事での英語学習で次のようなことはしていましたか」という質問に、「やったことがある」と回答した％。

表5-9 学校の授業以外の1日の英語の勉強時間 (％)

英語習熟度	ほとんどしない	15分	30分	45分	1時間	1時間30分	2時間	2時間以上	不明
1	34.0	26.4	18.9	1.9	7.5	3.8	3.8	0.0	3.7
2	25.4	17.3	24.0	12.0	10.7	4.0	1.3	1.3	4.0
3	17.0	19.1	34.0	4.3	14.9	2.1	8.6	0.0	0.0
4	13.9	5.6	16.7	13.9	19.4	13.9	11.0	5.6	0.0

注) 「ふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日だいたい何時間くらい英語の勉強をしていますか」という質問に対する回答。

た後では、学習時間以外の要因も、学習効果に関係してくることを示唆している。その要因の1つとして、学習の内容が挙げられるが、たとえば、習熟度レベルが「4」の生徒の36.1％は、家庭学習として「自分が選んだ問題集」を使用しているのに対し、レベル「1」から「3」の生徒では、わずか12.0％しか自ら教材を選ぶことはしていない。また、「教科書や参考書以外の英語の本を自分から進んで読む」ことについては、レベル「1」から「3」の生徒では16.6％しか実行していないが、レベル「4」の生徒では41.7％が実践している（図表省略）。このように、学習時間を増やすことは、ある一定のレベルまでは効果的な学習につながるが、それ以降は、自らが積極的に英語学習に取り組む姿勢を持ち合わせつつ、学習の質を高めていくことが必要であろう。なお、学習時間については、習熟度レベルが上がるにつれて学習塾への通塾率が上がっていることから（図表省略）、通塾が家での学習にも関連してくることから考えると、習熟度レベルの高い生徒については、学習塾が学校の授業以外での英語学習に大きな影響を及ぼし

ていることがわかる。

4) 受けたい英語の授業

習熟度別に、どのような英語の授業を期待しているかについては、表5-10のとおりである。どのような授業を期待するかについては、英語が好きであるかどうか大きく関わると思われることから、英語に対する認識も含めて分析を行った。全体の傾向としてはどの習熟度レベルであっても、「入試に役立つ授業」を受けたいと思っている生徒が一定の割合で存在し、習熟度が高い方（「3・4」）が、「積極的なコミュニケーション能力が身につく授業」を求めている傾向があることもわかる。

英語に対する認識を加えて、細かく見ると、習熟度が高く英語が「好き」な生徒は、「入試に役立つ授業」(21.2%)よりも、「積極的なコミュニケーション能力が身につく授業」(42.4%)をより多くが望んでいることがわかる。また、習熟度は低い（「1・2」）が英語が「好き」な生徒は、「入試に役立つ授業」(39.1%)をより多く求めていることから、英語に対する肯定的な認識を持っていたとしても、習熟度に

表5-10 英語に対する認識と習熟度別による受けたい英語の授業

(%)

英語習熟度	レベル1・2			レベル3・4		
	全体	好き	好きではない	全体	好き	好きではない
入試に役立つ授業	43.0	39.1	43.8	32.5	22.2	40.4
英語が好きになる授業	37.5	21.7	41.0	16.9	11.1	21.3
積極的なコミュニケーション能力が身につく授業	8.6	21.7	5.7	27.7	41.7	17.0
高等学校やそれ以降の英語学習に役立つ授業	3.1	8.7	1.9	9.6	8.3	10.6
言語や文化に対する理解が深まる授業	0.8	0.0	1.0	3.6	2.8	4.3
その他（自由記述）	4.7	4.3	4.8	3.6	2.8	4.3
人数（計211名）	128	23	105	83	36	47

注)「無回答・不明」は省略している。

応じて、授業に対して異なる期待を持っていることがわかる。また、英語が「好きではない」生徒については、習熟度が低い生徒は44.2%、高い生徒は39.1%と、ほぼ同じ比率で「入試に役立つ授業」を求めている。その次に多く求められている授業は、習熟度が高い生徒は、「英語が好きになる授業」(21.7%)、「積極的なコミュニケーション能力が身につく授業」(17.4%)、「高等学校やそれ以降の英語学習に役立つ授業」(10.9%)とさまざまであるのに対し、習熟度が低い生徒は「英語が好きになる授業」(41.3%)に回答が集中する。このことは、習熟度が高い生徒は、たとえ英語が好きでなくても、特定の目標があればそれに向かって学習を進めることができるが、習熟度が低い生徒は、まずは英語に対して肯定的な印象を持つことから始めることが重要であることを、生徒自身も認識していることを示しているのかもしれない。

今後、英語の授業において、習熟度別クラス編成を取り入れている場合は、習熟度だけでクラス分けをするのではなく、英語に対する認識についても考慮し、生徒のニーズに適した授業を実践していくことが効果的な学習を促進させることを、これらの結果は示唆している。

5) 各技能に対する習熟度別の認識

表5-11から、英語の習熟度が高くなるに

つれて、4つの技能をすべてバランスよく、「好き（とても+まあ）」と回答する傾向があることがわかるが、習熟度が低い生徒については、「英語で文章や本を読むこと」をもっとも否定的にとらえていることがわかる。「中学教育で育成する英語力」の範囲内を表す習熟度レベルの「1」(17.0%)と「2」(18.7%)ではほとんど差がない。そして、そのレベルを超えた「3」(40.4%)とは大きな差がみられる。このことは、英語で読むことに対する意識については、「中学教育で育成する英語力」を総合的に身につけて初めて、一部の生徒が嫌悪感を感じなくなり、さらにその上のレベル(72.2%)になって初めて、肯定的にとらえることを示している。つまり、読むことへの意識の変化については、閾値しきい値のような境界点が存在していることが示唆される。高等学校の英語学習ではリーディングに重点が置かれる傾向が強いことから、リーディングの学習に対する意識を高めることが中学校英語の1つの課題であろう。

次に、ライティング習熟度の観点から各技能に対する生徒の認識を見ると、ライティング習熟度レベル「1」については、どの技能においても、英語全体の習熟度レベルが「1」の生徒よりも「好き」と回答している生徒が少ない。ライティング習熟度レベル「1」については、どの技能においても英語全体の習熟度レベルが「1」の生徒よりも「好き」と回答している生

表5-11 習熟度別の4技能に対する認識

(%)

		英語で話すこと	英語を聞くこと	英語で書くこと	英語で文章や本を読むこと
英語習熟度	1	30.2	30.2	20.8	17.0
	2	38.7	46.7	34.7	18.7
	3	46.8	42.6	55.3	40.4
	4	72.2	75.0	75.0	72.2
ライティング習熟度	1	19.2	23.1	11.5	7.7
	2	39.8	40.8	38.8	25.5
	3	46.0	52.0	44.0	40.0
	4	70.3	70.3	73.0	56.8

注)「とても好き」+「まあ好き」の%。

表5-12 習熟度別の苦手と感じている項目

(%)

		単語を覚えるのが難しい	文法が難しい	英語の文を書くのが難しい	英語の文を音読するのが難しい	英語を話すのが難しい	英語を聞き取るのが難しい
英語習熟度	1	81.1	90.6	90.6	69.8	79.2	66.0
	2	69.3	92.0	86.7	41.3	66.7	70.7
	3	59.6	78.7	76.6	36.2	63.8	72.3
	4	55.6	69.4	63.9	25.0	38.9	52.8
ライティング習熟度	1	69.2	96.2	96.2	84.6	69.2	65.4
	2	70.4	81.6	79.6	40.8	71.4	69.4
	3	74.0	94.0	90.0	50.0	60.0	64.0
	4	51.4	73.0	64.9	18.9	48.6	64.9

注1)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 11項目中6項目のみ表示。

徒が少ない。このことは、中学校段階での「英語で書くこと」の学習は他の技能の学習と密接に関わっており、書くことを肯定的にとらえるためには、他の技能の学習に対する認識も高める必要があることを示している。ライティングの習熟度レベルがもっとも高い「4」の生徒については、「英語で文章や本を読むこと」について肯定的にとらえているのは半数程度(56.8%)であり、英語全体の習熟度レベル「4」(72.2)と比べて差がある。これらの生徒の読むことへの意識を高めるには、リーディングと得意なライティングとを融合した活動が効果的であろう。たとえば、読んだものの要約を書いたり、英語のメールを読んでそれに対して返信のメールを書くような活動が有効である。

読み書き全般については、英語母語話者でも自然習得が可能な技能ではなく、一定の学習が必要となることから、一般的に、文字に関する読み書きの技能を向上させるのは、音声に関する「聞く」、そして「話す」ことよりも難しい。基本的な読み書きについては、外国語としての英語を学習し始める中学生にとっての最初の関門といえるだろう。

6) 英語学習のつまずき

表5-12から、単語や文法、そして英語の文を書くことについては、英語習熟度が上がるにつれて、難しさを感じなくなっていることがわかるが、全体として、難しいと感じる生徒が多いといえる。ライティングの習熟度

レベルが「4」であっても、「英語の文を書くのが難しい」と感じている生徒は64.9%にも上ることから、「5) 各技能に対する習熟度別の認識」で述べたように、ライティングという技能の特徴に原因があるのであろう。文法については、新学習指導要領では、技能と関連づけて学習していくことがこれまで以上に強調されているが、文法を単独でとらえてその難しさを感じさせるよりも、技能の中に埋め込んで学習していくことによって、文法の難しさが解消されることが今後は期待される。

「英語を聞き取るのが難しい」については、英語習熟度別にみても、また、ライティング習熟度レベル別にみても差が少ない項目であり、特に、ライティング習熟度別においては、どのレベルでもほぼ同じ割合で難しさを感じている生徒が存在することがわかる。おそらくはこの結果のとおり、どのレベルの生徒にとっても聞くことについては、その取り組みやすさに差がないため、リスニング活動から授業が始まるケースが多いのだろう。そして、徐々に別の技能へ移行していく中で、習熟度によって難しさを感じる程度が異なっていく、一般的に最終段階に位置づけられる傾向が多いライティング活動において、習熟度によって困難度に大きな差が生まれることが推測される。新学習指導要領でも強調されている技能連関の手法を効果的に用いて、自然と他の技能へと橋渡しができれば、どの技能においても、難しさを感じる生徒が少なくなることが想定できる。

英語を話すことについては、英語習熟度レベル「4」(38.9%)になるとその難しさを感じるものが顕著に少なくなる技能であることがわかる。つまり、話すことは一定の割合で上達していくものではなく、あるレベルに到達して初めてつまずきを感じにくくなる技能である可能性を、この結果は示している。スピーキングでは、話す内容やその展開、文法、語い・表現、そして話し相手など、話すことに関わる諸要素を一括して瞬時に処理する必要があるため、個別の要素が満足のいくもの

であっても、それらすべてが整う段階にならないと、その達成感が生まれないのであろう。したがって、この感覚を得る段階が、「ネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル」を表す習熟度レベル「4」であることは、妥当であるといえる。

最後に、中学校の授業で頻繁に実践されている音読について検証してみる。音読は、表5-12で示している項目の中では、つまずきを感じている生徒がもっとも少ない。英文の音読は通常、意味理解が達成されたものについて、語レベルの発音練習を経たあとに行われることが多い。意味が理解されたものを声に出して読むことは抵抗感が非常に少なく、また、音読によって単語や文が覚えられるという達成感を得ることができるため、音読は非常に取り組みやすい活動だといえる。新学習指導要領の下でも、効果的な音読活動を継続的に実践していくことが期待される。そして、さらに興味深いことは、音読に対するつまずきが、ライティングの習熟度を説明する要因となっていることである。ライティング習熟度レベル「1」では、84.6%の生徒が音読に難しさを感じており、また中間層のレベル「2」と「3」では約40～50%が難しさを感じているが、レベル「4」においては、18.9%の生徒しか音読に難しさを感じていない。先に述べたとおり、意味を把握しているものを声に出す活動である音読は、英語を発信するという意味において、ライティングで必要なスキルの基盤的な部分を担っていると考えられる。ライティングに習熟すること、音読に取り組みやすさを感じることは関連があるようだ。

3 まとめ

本調査では、習熟度別に「生徒調査」の項目を細かく分析したが、これからの学習や指導への示唆としていくつか重要な点が示されたといえる。まず、小学校での英語については、音声面の練習を組み込むことは重要であると

いうこと。次に、中学校での英語については、比較的取り組みやすい「聞くこと」から学習を始め、技能融合の手法を用いて、難しいと感じる生徒が多い「書くこと」や「読むこと」にスムーズにつなげていくとよいということである。その際には「音読」を適宜取り入れながら、その目的を最終的にはライティングへの橋渡しとしてとらえ、継続的に音読を実行していくことが望まれる。また文法についても、このような技能融合の中に組み込むことによって、難しさが解消されることが期待できる。「話すこと」については、ある程度のレベルに到達するまでは成就感を味わうことは難しいことを踏まえて、段階的に到達目標を設定することなどを通して指導を行いたい。このような指導に加えて、習熟度に応じて変

化するであろう授業へのニーズと、おそらくどの習熟度レベルでも共通する入試での成功願望など、両方をうまく満たすような学習や指導を展開していくことが求められる。また授業外では、学習塾などにおいて学習時間を増やすだけではなく、自ら学習内容や教材を選択する機会を設け、自律的な学習者へと育成することも重要であろう。

最後に、本調査では、習熟度別に「生徒調査」の結果を細かく分析し、習熟度によって異なる要素を中心に議論したが、習熟度に関わらず、中学2年生全般の傾向についても考慮に入れながら、上記の示唆を再度検討し、今後の学習や指導をより一層効果的なものにしていくことを期待したい。